

# 「鯨っ子学習」第3学年実践記録

報告者 溝口 賢一

## I 本実践の目的

本校の3年生は、個人研究（以下、鯨っ子学習）に取り組む時期を11月から2月に設定されている。そのため、本実践では、本校の研究の概要である【A】「アカデミック・ライティングについて学ぶ段階」に焦点を当てて実践する。具体的には、本学級の児童（3年3組35名）が主体的に鯨っ子学習を進めるための土台作りと児童が取り組む課題の変容を、実践を通して示していく。

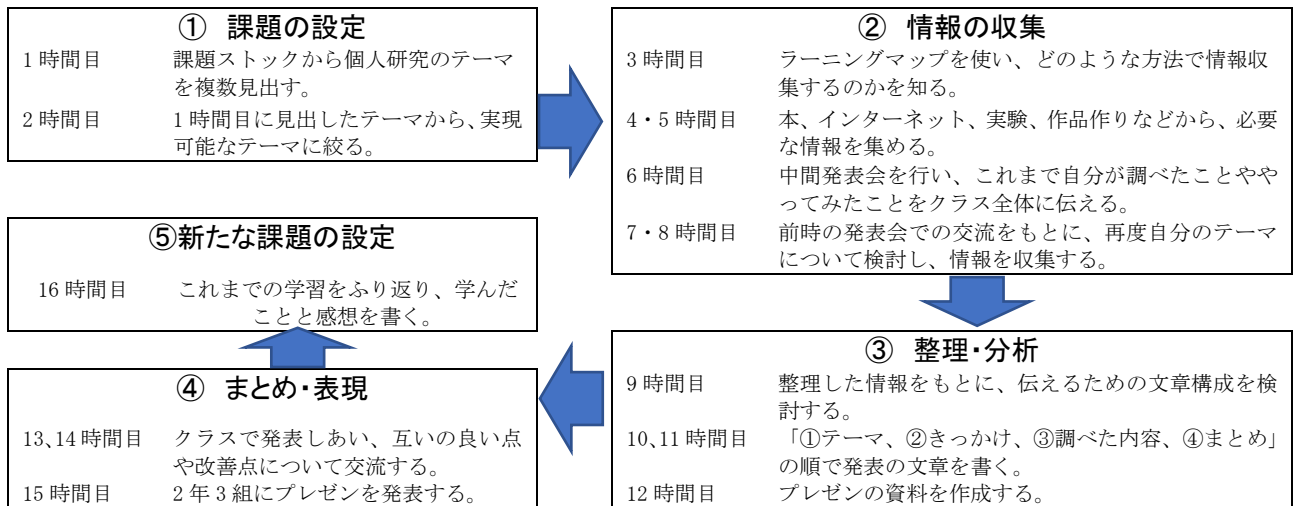
上記のような土台作りを行うための手立てとして、ラーニングマップを活用し、課題解決の過程をつかむことができるようにする。具体的には、総合的な学習の時間を年間で三つのサイクルに分け、課題解決の過程を児童の中に落とし込んでいく。鯨っ子学習は、第3サイクルに設定し、第1・第2サイクルは、学級全体で取り組みその課題を解決する。その際、ラーニングマップを活用しながら、第1・第2サイクルの課題を解決していく。そしてこの経験と学んだことをもとに、第3サイクルの鯨っ子学習に生かすことができるようにしていく。

上記の手立てにより、児童が主体的に鯨っ子学習を進めることができるようにしていく。

### 1 単元の目標（児童の姿）

- ア 身の回りの自然界の法則的なつながりやきまり、人の言動の心理的な背景を紐解くことができる。 【読解力の側面】
- イ 情報・概念を新たな方法で使ってみることができる。 【創造的思考の側面】
- ウ 伝達手段の中に言葉が加わり、意図を明確に伝えようとすることができる（言葉＋非言語手段）。 【他者とのコミュニケーションの側面】

### 2 単元の計画（令和4年11月～令和5年2月実施予定）※12月現在では6時間目まで実施



## II 指導の実践

### 1 ラーニングマップを用いた課題解決の実践

本学級は、総合的な学習の時間を大きく3つのサイクルに分けて取り組んできた（図1）。第1・第2サイクルを「特別支援学校との交流会」をゴールとして設定し、学級全体で取り組んだ。第1サイクルでは、「障害と特別支援について知る」として第2サイクルに入る前の「課

総合的な学習の時間のサイクル		実施時期
1	障害と特別支援について知る （課題の設定）	【学級全体】 6月～7月
2	特別支援学校との交流会を計画・実行する （情報の収集、整理・分析、まとめ・表現）	【学級全体】 9月～10月
3	「鯨っ子学習」に取り組む （課題の設定～まとめ・表現）	【個人研究】 11月～2月

図1 総合的な学習の時間のサイクル

題の設定」を行った。第2サイクルでは、第1サイクルで設定した課題から、特別支援学校との交流会の計画を行い、実行した。これらの二つのサイクルを経て、第3サイクルである「鯨っ子学習」に取り組んでいる。

### ① 第1サイクルの実際

第1サイクルは6月～7月にかけて行った。このサイクルを始める前に、オリエンテーションとして5月に総合的な学習の時間と、ラーニングマップについての説明を行った。このオリエンテーションの

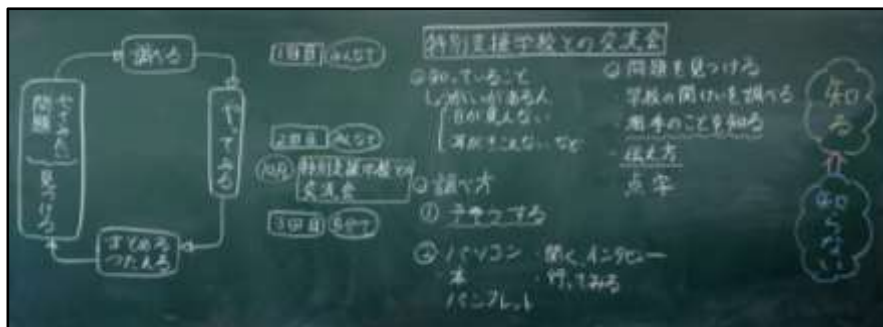


図2 第1サイクルのテーマ設定時の板書

あと、二つのサイクルのゴールを「特別支援学校との交流会」として設定し、見通しをもてるようにした。その中で、児童は障害がある人や特別支援学校について、ほとんど何も知らないことに気が付いた。そこで、第1サイクルのテーマを「障害と特別支援について知る」とした(図2)。

テーマが明確になった後は、個人で調べ活動を行い、障害と特別支援についてそれぞれが疑問に思ったことや知らないことを調べた。調べる方法としては、主に本とインターネット、家庭でのインタビューであった。これらの調べ活動のあと、全体で調べたことを交流し、障害と特別支援学校についての理解を深めた。第1サイクルで共有した知識をもとに、第2サイクルへとつなげた。

### ② 第2サイクルの実際

第2サイクルは9月～10月にかけて行った。このサイクルのテーマは「特別支援学校との交流会の計画・実行」であり、第1サイクルの終末で共有した知識をもとに交流会を成功させるための課題を設定した。交流会を計画する上で、児童は障害のある子への配慮が必要であることに気付いた。そこで、交流会を計画・実行するための課題を「障害のある子ども自分たちも楽しめる交流会にするには、どのような計画を立てればよいのだろうか」として設定した。

時間	内容
1時間目	課題を設定する。
2時間目	特別支援学校の担任の話を聞く。
3時間目	交流会の内容と役割分担を決める。
4・5時間目	係ごとの計画を立て、準備をする。
6時間目	リモートで特別支援学校の児童との交流をする。
7時間目	計画の修正と交流会の準備をする。
8時間目	交流会を行う。
9時間目	学級でふり返りを行う。

図3 第2サイクルの流れ

第2サイクルは9時間で展開した(図3)。

児童は課題を設定した後、交流する特別支援学校の担任から、特別支援学校の説明と交流する学級の児童の障害とその特性を聞いた。

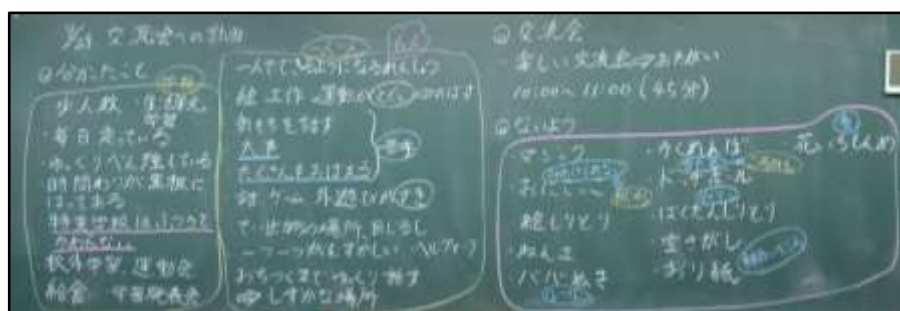


図4 3時間目の板書

その後、交流会の内容を話し合い、役割に分かれて計画・準備を進めた(図4)。

その後、リモートで実際に特別支援学校の児童と交流を行った。リモートでの交流で、児童はどのような配慮が必要かを話し合い、計画の修正とそれに伴う準備を行った。

交流会では、それぞれが役割ごとに交流会を運営し、計画通りに進めることができた。さらに、課題であった特別支援学校の児童への配慮も解決することができていた。

## 2 実践の分析

第1・第2サイクルの終末では、これまでの学習で学んだことについてふり返しを行った。ふり返りの具体的な内容は、以下の通りであった。

表1 第1・第2サイクルのふり返りの内容

これまでの学習で学んだこと	児童の数（延べ人数）
調べ方（調べる方法やPCの使い方など）	2人
メモの取り方	3人
話し合いや相談の仕方	9人
意見や発表の仕方（話し方・聞き方・伝え方）	7人
色々な人との交流の良さ	10人
各教科で学習したことを生かすこと ・ローマ字の使い方 ・文章のまとめ方 ・手紙の書き方 ・地図の見方、使い方 ・イラストの描き方 ・プログラム作り ・本の読み方 ・道徳で学んだこと（相手の立場を考える）	19人
福祉（障害とその支援）について	2人

上記の内容から、児童は主に3つのことについて学んだという実感があると考えられる。一つ目は、「調べ方とその整理の方法」である。これは主にラーニングマップの【情報の収集】と【整理・分析】で活用できる力である。二つ目は、「他者との交流の仕方」であり、主に【整理・分析】と【まとめ・表現】の段階で活用できる力である。三つ目は「各教科での学習内容を生かすこと」で、これはラーニングマップの全ての場面で活用できる力である。これら3つの力が児童に育まれたと考える。

第2サイクルの終了後、第3サイクルの親子学習へのつなぎとして、ラーニングマップに各教科で生かせる力を整理した（図5）。オリエンテーションで同じことを行った時よりも、項目が増え、より具体的な内容になっている。このことから、児童がラーニングマップの使い方を理解し、活用するための土台作りができたと考えられる。

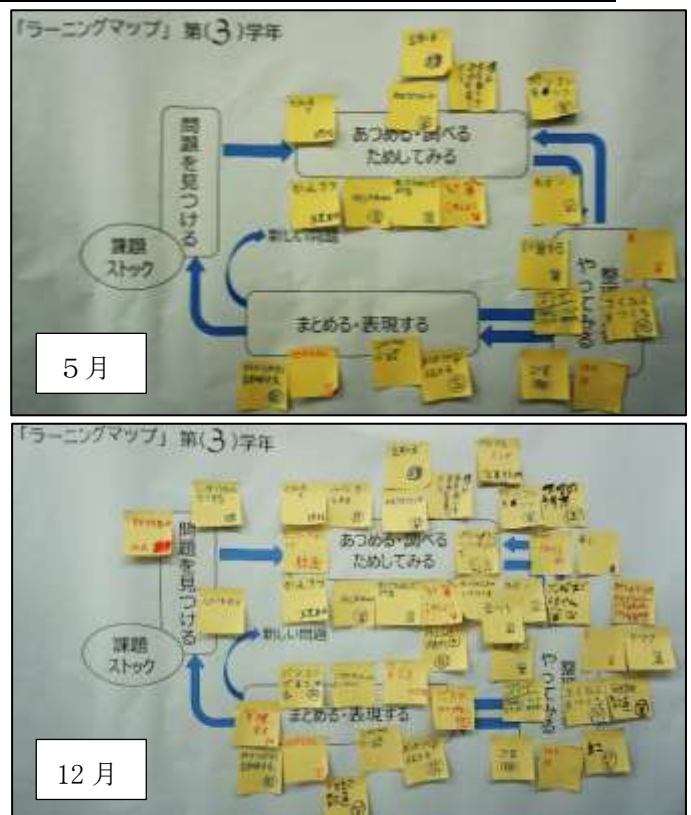


図5 ラーニングマップの変容

## III 児童の変容

本学級の児童は、総合的な学習の時間が始まった5月から鯰っ子学習で取り組みたい課題をノート（以下、課題ストックノート）に蓄積してきている。以下は抽出児と学級全体の課題の変容である。

### 1 抽出児の課題の質的変容

12月までに集めた課題ストックノートの内容から、以下の3人を抽出しその内容を示す。

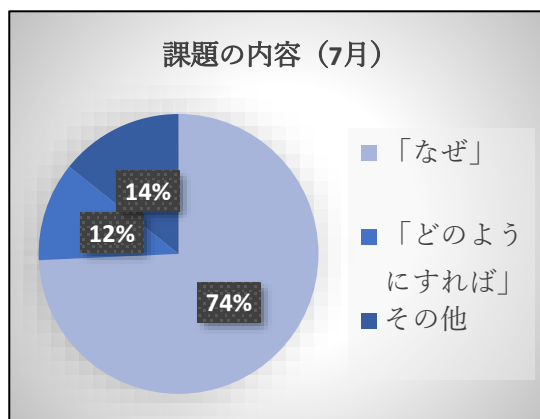
表1 抽出児が蓄積してきた課題 ※★は鯰っ子学習で取り組むテーマ

時期	A児	B児	C児
7月	・同じものをいくつも作れるのはなぜ？ ・幽霊は本当にいるの？	・なぜ学校ができたのか ・オタマジャクシは何を食べるのか ・ひまわりはどうやって育つの？	・地図記号はどうやって作られたのか調べたい。 ・なぜ空は青いのか ・季節の花を調べたい
10月	・怪奇現象は本当にあるの？ ・色々なお菓子のつくり方	・カエルは何を食べるのか ・発達障害とはどんな病気なのか ・どうやったら保育士になれるのか	・海はなぜ青いのか。 ・消しゴムはどうやってできるのか。 ・よく飛ぶ紙飛行機を作りたい。
11月	★3R（リユース、リデュース、リサイクル）をみんなに広げるにはどうしたらいいのか	★イカを使ったオリジナルの料理を作りたい。	・シールメーカーを使わずにシールを作りたい。 ★本当に売れるオリジナルシールを作りたい。

上記は抽出児3人の課題内容の変容である。総合的な学習が始まった当初は、「なぜ」というような漠然とした疑問であった。知識として補完できるものがほとんどであり、中には実証不可能な疑問もある。上記の3人は、自分で自学として調べ活動や試し活動を行い、10月までの疑問の多くは解決してきている。そのような「なぜ」が、学習が進むごとに「どのようにすれば」解決できるようになるのかという課題に昇華してきている。

### 2 学級全体の課題の質的変容

右記の図6に見られるように、学級全体でも課題の質的な変容が見られた。抽出児と学級全体の傾向から、実際にラーニングマップを意識した活動を行い、課題解決の過程やその中で培われた各教科の学びの生かし方を体験したことで、より現実的で質の高い課題を解決したいという思いが現れたのではないかと考えることができる。



## IV 実践の整理

本実践では鯰っ子学習に入るまでの土台作りに焦点を当てて実践してきた。その成果と今後の展望について以下に示す。

### 1 実践の成果

- ・ラーニングマップを活用し課題解決の過程が培われたことで、【創造的思考の側面】の「情報・概念を新たな方法で使ってみる」土台作りができた。
- ・課題が質的に変容したことで、より現実的な課題解決を行えるようになった。

### 2 今後の展望

実際に鯰っ子学習をまとめ、下学年にプレゼンすることで、これまでに学んだことを活用していく姿を探る。

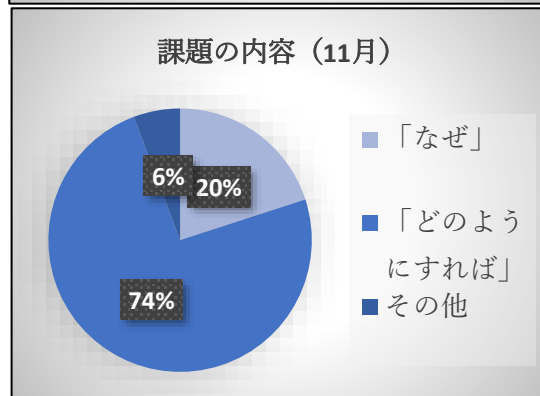


図6 学級全体の課題の質的変容